

『三國遺事』における神の受戒について

孫 眞（政完）

1. 始めに

仏教は、各地域に拡大する過程で基層信仰の様々な神と遭遇した。これは東アジア仏教の場合も同じであり、南北朝時代に主に山林に進出し始めた中国仏教は山岳神と出会うようになった。この時期、山岳神を仏教に帰依させ仏教を守護するための思想、すなわち、神仏習合思想を形成する。これはまた仏教の伝来と受容過程で朝鮮半島と日本にもそのまま伝わってきた。『三國遺事』にはこのような習合現象に関する記事が散在しているので、これをもとに韓国仏教の中に現れた神の特徴を把握することができる。外来宗教である仏教が伝来された地域の基層信仰を解体するか、それとも包摂するかによって、仏教の教化方法は違う形で想定せざるを得なかった。神に対する否定と肯定、または、基層信仰の解体と包摂という二つの範疇につき、『三國遺事』で語る神の様子と性格は多少異なる。『三國遺事』における神の受戒についての用例は以下のようなものである。

2. 卷三塔像第四「臺山五萬眞身」条

寶川常汲服其靈洞之水故晚年肉身飛空到流沙江外蔚珍國掌天窟停止誦隨求陀羅尼日夕爲課窟神現身白云我爲神已二千年今日始聞隨求真詮請受菩薩戒既受已翌日窟亦無形寶川驚異留二十日乃還五臺山神聖窟（T49, 999b）

この記事の内容によると、掌天窟の窟神が菩薩戒を受けてから掌天窟の形態が無くなったということで、掌天窟はもう存在しないといえる。ところが、掌天窟は慶尚北道の蔚珍郡近南面九山里にある聖留窟と理解されている。『三國遺事』卷三塔像第四「臺山五萬眞身」条の掌天窟の窟神を蔚珍の聖留窟の土着的な信仰の対象として把握する見解がある。掌天窟の窟神は二千年も窟神でありながらも、寶川太子が来て隨求陀羅尼を念誦する前までは仏の名を聞いた事がなかったということからして、掌天窟の窟神が伝統的な土着神であることを反映しているとい

(26) 『三國遺事』における神の受戒について（孫）

う¹⁾。掌天窟の窟神は蔚珍地域の土着神として窟神信仰及び、重要な祭祀の対象とされ、掌天窟とその一帯は古代、蔚珍の社会では神聖な地域とされたともいえるのである。

3. 卷四義解第五「慈藏定律」条

慈藏の行蹟を伝える代表的な中世資料として、中国の道宣の『續高僧傳』と一然の『三國遺事』がある²⁾。『續高僧傳』には唐に滞在した時期を中心に身辺を記録した一方、『三國遺事』には叙事性の深い話を幅広く受用しており、慈藏の活躍を多方面に提示している。

資料 A 擁啓表入終南雲際寺之東嶠架崑爲室居三年 人神受戒 靈應日錯辭煩不載（『三國遺事』 T49, 1005b）

資料 B 啓敕入山於終南雲際寺東懸嶠之上架室居焉旦夕人神歸戒又集時染少疹見受戒神爲摩所苦尋即畫像除愈 往還三夏常在此山將事東蕃辭下雲際見大鬼神其衆無數帶甲持仗云將此金輿迎取慈藏復見大神與之共鬪 拒不許迎 藏聞臭氣塞谷蓬勃即就繩床 通告訣別 其一弟子又被鬼打斃死乃蘇藏即捨諸衣財行僧德施又聞香氣遍滿身心神語藏曰今者不死 八十餘矣（『續高僧傳』 T50, 639b）

新羅の律宗の創始者である慈藏は善徳女王の仁平三年（636）に入唐した。上の資料 B では、終南山で慈藏が3年間（640-642）終南山雲際寺の東側に庵を建て、修行しながら経験したことが、比較的詳細に叙述されている。しかし、資料 A ではこのような事実について煩わしいこととして簡略に述べている。

一方、資料 B では“戒神”が慈藏の軽い病を治したという³⁾。『續高僧傳』では、このように受戒した後、神に見える“戒神”ということが現れる。『高僧傳』に比べ『續高僧傳』では受戒した神に関する記事が増え、これらは戒律を伝えた僧侶の修行の際、守護の役割をしていた。そして、この時期に慈藏は生死の瀬戸際に立たされたとの記録が残っている。大鬼神が慈藏を殺しに来た一方、それを阻む大鬼神も存在していたのである。各々の対立項となっている大鬼神が象徴することに対しては、様々な推測が行われている。例えば、慈藏が中国に滞在した際、唐太宗は抑仏崇道的な立場を貫いていたから、『續高僧傳』の著者である道宣は太宗の道教優先政策に対し批判的な立場を示した。慈藏を殺そうとした勢力とこれを阻もうとした勢力は、慈藏がこの当時の道教と仏教の論争に介入していた可能性を隠喩的に表現したと考えられる⁴⁾。または、慈藏とその弟子が終南山で実際に病を得て死にかけたことをそのまま伝えようとしたとも考えられる⁵⁾。

4. 卷四義解第五「心地繼祖」条

適聞俗離山深公傳表律師佛骨簡子設果訂法會決意披尋既至後期不許參例乃席地扣庭隨衆禮懺經七日天大雨雪所立地方十尺許雪飄不下衆見其神異許引入堂地撫謙稱恙退畫像處房中向堂潛禮肘顙俱血類表公之仙溪山也地藏菩薩日來問慰泊席罷還山途中見二簡子貼在衣褶間持迴告於深深曰簡在函中那得至此檢之封題依舊開視亡矣深深異之重襲而藏之又行如初再迴告之深曰佛意在子子其奉行乃授簡子地頂戴旼山嶽神率一仙子迎至山椒引地坐於崑上旼伏崑下謹受正戒（T49, 1009b）

眞表律師の簡子を受けたという永深が果証法会を開いたが、これに参加した心地が修行していた山に帰る途中、自身の襟に二つの簡子が挟まっていることを発見した。これを仏の意と考えた永深は簡子を心地に渡し、頭にこれを乗せたまま山に帰る彼の前に、中岳の山神が現れ戒律を受けたという話である。伝来以降、仏教は神信仰の領域を含めた社会の多様な分野で積極的に自分の領域を拡大し、伝来地域の固有な信仰との緊張関係を生み出した。習合現象が現れた後にもこの緊張関係は信仰と思想の問題を含めて引き続き、神と仏〔僧侶〕の様々な伝承を形成することになった。これは神信仰の領域に浸透しようとする活動を始めた仏教徒らが、この状況を克服、または受用するための意図として形成されたのである。「心地繼祖」の記事でも山林修行者を中心とした仏教勢力が既存の山神信仰と融和しながら教線を拡大し、仏教を守護する神の役割と機能を知ることができる。それは、仏の簡子〔聖簡〕を奉る場所を山神と共に決め、これに対して山神が賛嘆すると言う記事が次のように語られているためである。

地曰。今將擇地奉安聖簡 非吾輩所能指定 請與三君憑高擲簡以卜之 乃與神等陟峯巔 向西擲之 簡乃畫像風颭而飛 時神作歌曰 礙崑遠退砥平兮 落葉飛散生明兮 覓得佛骨簡子兮 邀於淨處投誠兮既唱而得簡於林泉中 卽其地構堂安之 今桐華寺籤堂北有小井是也（T49, 1009b）

周知の通り、仏教はインドで生じ、東漸した。仏教が伝来する過程で、該地域の固有思想あるいは信仰との軋轢・相剋という問題に出遭ったと見られる。なお、仏教はすでに中国などの各地で固有信仰を克服する経験を積んできた。従って、その経験の蓄積の一つである山神交流譚の伝承が布教の中で生じた可能性も想定できる。

5. 卷五神呪第六「惠通降龍」条

龍既報冤於恭往機張山爲熊神慘毒滋甚民多梗之 通到山中 諭龍授不殺戒神害乃息（T49,

(28) 『三國遺事』における神の受戒について（孫）

1011a)

中国の蛟竜が朝鮮半島に来て竜に変じ、また、竜から熊へと変じた複雑な構造の話になっている。仏教的発想と見られる変身還生譚に民間信仰的な要素が結合された叙事形式、すなわち、仏教説話に民間伝承が加味された話である。恵通と蛟竜の対立と葛藤から、結局、不殺戒を通じ、仏教優位の叙事構造を表している。伝統的な竜信仰に対した外来宗教としての仏教が優位構図で伝承したことは、『三國遺事』のなかで、卷一紀異、第一の「射琴匣」条と卷二紀異、第二の「眞聖女王居陁知」条などで確認できる。

ここで注目すべきは、社会秩序を維持するため、仲裁の役割を果たす僧侶の機能である。恵通は人間の間で発した問題に対し調停に乗り出したのではなく、顕界の存在である人間と冥界を治める竜の間を仲裁した。密教を修行する仏僧の役割だけではなく、社会の基本構造を維持する任務を任されて解決し、客観的な仲裁者としての役割、社会を統合し、維持する機能を持っていたと認識されていた。平常には、顕界の存在である人間と冥界の存在(神、山神、霊、竜 等)が各自の領域で暮らすと理解された。しかし、顕界の正常な秩序を弱化させる自然災害や伝染病などのように予測不可能な問題が発生した時こそ、僧侶が介入できる瞬間であった。こういう場合、神異力を持った僧侶らが、その力を以って問題を解決できると思われた。仏教僧侶に対してのこのような仮説的分析は、僧侶の神異な能力への絶えざる要求があったからだと考えられる。自然災害や伝染病などのように、この世の秩序を脅かす多様な種類の事件があったことは当然のことである。人々は仏教の僧侶らが様々な問題を解決できることに期待を持っていた。そして、僧侶らはその要求に対して、仏教が初めて伝来した中心地域の外郭である地方と山岳地域にその影響を拡大しながら、期待に応えた。一然の『三國遺事』で神異譚は篇目を問わず全体に及んで述べられている。これは、少なくとも一然が考えるには、このような僧侶らが神異なる力を持っていたことを意味し、『三國遺事』の全般に現れる彼らの数は、そこに由るとも考えられる。

6. むすび

仏教と基層信仰である神信仰の関係の変化は、神に対する仏教からの授戒の中によく現れている。『三國遺事』卷三塔像、第四の五臺山萬眞身と卷四義解、第五の地藏定律、心地繼祖、卷五神呪、第六の恵通降龍では、それぞれの窟神、人神、山神、熊神に変わった毒竜などが仏僧から受戒した。このような仏教と神の

関係は中国仏教の論理でも考えられることになる。『高僧傳』卷六の曇邑伝では「夢見山神求受五戒爲說法授戒」（T50, 362c）と、神に授戒して以来、中国仏教の神は表層的な意味としての仏教が深層的な意味を持つために克服する対象として必要な存在という点でその意味を持つようになった。つまり、山林に進出して山神に出会い、それを仏教に帰依させて仏教を守護するようにする思想を形成させたものである。その具体的な方法の一つとして神に戒を授けたのだ。

1) 盧重國（1999）を参照。

2) 慈藏の生涯についての基本資料としては、道宣の『續高僧傳』「唐新羅國大僧統釋慈藏傳」（T50, 639a-640a）, 「唐京師普光寺釋法常傳」（T50, 540c-541b）と道世の『法苑珠林』64「唐沙門釋慈藏傳」（T53, 779b-c）ほかにも『三國遺事』「慈藏定律」（T49, 1005a-1006a）などを参照。

3) 長坂一郎（2004）を参照。

4) 南東信（1992）を参照。

5) 南武熙（2001）を参照。

〈参考文献〉

盧重國 1999「古代 蔚珍의 歴史 概観」『韓國古代社會와 蔚珍地方』韓國古代史學會。

吉田一彦 1995『日本古代社会と仏教』吉川弘文館。

長坂一郎 2004『神仏習合像の研究』中央公論美術出版。

南東信 1992「慈藏의 佛教思想과 佛教治國策」『韓國史研究』76。

南武熙 2001「『續高僧傳』「慈藏傳」과 『三國遺事』「慈藏定律」의 原典内容比較」『文學史學哲學』19。

吉川忠夫 2011「『高僧伝』から『続高僧伝』へ」『図書』744, 岩波書店。

Strickmann, Michel. 1978. "A Taoist Confirmation of Liang Wu-Ti's Suppression of Taoism." *Journal of the American Oriental Society* 98 (4).

〈キーワード〉『三國遺事』, 習合現象, 基層信仰

（東國大學校大学院）